

「運動嫌い」「体育嫌い」の実態と発生要因に関する研究  
－小学生・中学生・高校生における「運動嫌い」と  
「体育嫌い」の関連性に着目して－

吉川 麻衣 山谷 幸司 笹生 心太

キーワード： 生涯スポーツ 体育授業 体育教師

A Study of the Current Situation and Causal Factors of “Dislike for  
Exercise” and “Dislike for Physical Education”.

Yoshikawa Mai Yamatani Koji Sasao Shinta

Abstract

This paper studied about actual conditions and factors of Dislike for Exercise(DE) and Dislike for Physical Education(DPE). For this purpose, a survey was conducted on about 1500 students at elementary, junior high and high school in Miyagi prefecture.

This paper proved that DPE was higher than DE, and this tendency was remarkable in girls. DPE increased as year followed year, but DE did not have such a tendency.

Although “Teacher of Physical Education(TPE).” Had been pointed out as the main factor of DE and DPE, this study proved that many students who did not like DE or DPE had positive impression about TPE.

This study also proved that DE was deeply connected with the fact that “exercise & physical education - disliking” students lacked positive experience in exercise and their parents had not strong interest in exercise.

As for DPE, we did not find out remarkable significance among its factors.

Key Words : Lifelong fitness, Physical activity , Teacher of Physical Education

## I. はじめに

近年わが国において子どもの体力低下や運動離れが、深刻な問題となっている。そのため政府関係機関ではこの問題が度々採り上げられ、様々な改善策も提言されている。提言を受けた新学習指導要領では、保健体育（体育）の授業時数の増加や、12年間を見通した指導内容の改善を図り、「生涯にわたって運動に親しむ資質や能力を育成し、豊かなスポーツライフを実現することや体力の向上」がより一層強調された。しかし、そうした施策にもかかわらず、運動を積極的に行う子どもとそうでない子どもの二極化傾向や、運動や体育授業に対して非好意的、あるいは消極的態を持つ子ども（以下「運動嫌い」「体育嫌い」と呼ぶ）が依然として存在する。本来学校体育の役割は、運動の持つ楽しさや面白さを体育授業において指導することである。その中で、生涯スポーツの基礎となる教育の立場を強調しなければならない。しかし、「運動嫌い」「体育嫌い」の存在により、学校体育の目標達成はさらに困難になると考えられる。

## II. 研究の目的

筆者は「運動嫌い」「体育嫌い」を減らし、子どもの豊かなスポーツライフを実現するとともに、学校体育の充実・改善を目指したいと考える。そのために本研究では、まずこれまで曖昧にされる傾向があった「運動嫌い」「体育嫌い」の定義を明らかにする。次に、小学校から高等学校における児童生徒を対象に、「運動嫌い」「体育嫌い」の実態を調査する。そして、「運動嫌い」「体育嫌い」の発生要因を両者の関連性に着目して検討する。

## III. 先行研究の検討

### 1 「運動嫌い」「体育嫌い」の捉え方

#### (1) 「運動嫌い」の捉え方

「運動嫌い」の定義として、中込(1995)は、『学校体育授業事典』において「みずからスポーツ活動や身体活動を行うことに対して否定的態度を有する個人の総称」としている。また、小学校高学年の体育に対する好意度を分析した賀川(2002)は、「スポーツや身体活動一般に対して非好意的あるいは消極的態度をあらわす個人の総称」と示している。一方、円田(1989)は、『体育心理学』の中で、「運動嫌い」と「体育嫌い」を区別することなく、「運動嫌い」とは、「みずからスポーツを行ったり、参加の態度が消極的であったり、回避したり、拒否する態度をもった人のことをいうが、その場合、根拠がはっきりしているものもあれば、はっきりしない場合もあり、運動嫌いにはさまざまなタイプが存在し、その中で、スポーツや運動は好きだが学校で行われる体育は嫌いな体育嫌いが存在する」とし、「体育嫌い」はあくまで「運動嫌い」の中に存在するとしている。

#### (2) 「体育嫌い」の捉え方

「体育嫌い」の定義として、賀川(2002)は「スポーツや身体運動を素材として計画的・組織的に行う体育授業に対して非好意的あるいは消極的態度をあらわす個人の総称」としている。また、加賀(2006)は「体育嫌い」の要因の具体例をあげ、「授業の雰囲気・運動種目・施設用具・授業内容・教師の指導法・評価の仕方など、体育授業の経験の中で発生したもの」と定義している。さらに正木(1970)は「体育学習場面における特定のことがら(運動の種目や指導の仕方など)について、嫌いであるか、あるいは拒否するような心理状態になる場合がある。原因はともかく、体育の学習場面において学習者が拒否的な心理状態になること」と定義している。

### 2 従来における「運動嫌い」「体育嫌い」の捉え方の特徴

「運動嫌い」に関しては、先に触れたよう

に中込、賀川、円田らによって検討され、事典用語として一定程度定着している。しかし、これに比べて、「体育嫌い」に関しては、専門的な論文や報告書において、定義や意味が検討されてはいるが、専門用語としては必ずしも明確に定義されているわけではない。以上のことから、「運動嫌い」は専門的用語として定着しているものの、「体育嫌い」はその域に達していないと考えられる。さらに「運動嫌い」と「体育嫌い」の概念上の関連性も十分に明らかにされてはいない。

### 3 「運動嫌い」「体育嫌い」に関する先行研究

#### (1) 「運動嫌い」「体育嫌い」に関する先行研究の特徴

「運動嫌い」や「体育嫌い」に関する研究は、約40年前から行われ(賀川2002)、報告書を含め数多く残されてきた。それらをすべて紹介することはできないが、その中でも比較的多く引用・紹介されている研究に絞って整理していきたい。

「運動嫌い」「体育嫌い」に関する研究の特徴は大きく分類すると「実態」「要因」「指導法や解決策」の3点にまとめることができる。このうち紙幅の関係から「実態」と「要因」についてのみ整理すると、まず「実態」は、多くの研究に共通して「運動嫌い」より「体育嫌い」が多く存在し、その傾向は女子に強いということが明らかになっている。また学年進行による変化としては、「運動嫌い」「体育嫌い」は学年進行とともに増加し、その傾向は女子に強い。しかし、一方で中学校3年生、高校1年生から減少するという調査も一部ある(神奈川県立体育センター2007)。次に「要因」に関して、これまで数多くの研究が行われ様々な結果も報告されている。その中でも「運動嫌い」の主要な要因として「教師」の要因が挙げられている。また、「体育嫌い」の要因としても「教師」が

注目され、教師行動に着目した研究も行われている(兵頭1992)。以上のように先行研究では、「教師」は「運動嫌い」「体育嫌い」に大きな影響を与えていると考えられ、注目すべき点であるといえる。

#### (2) 「運動嫌い」「体育嫌い」に関する先行研究の限界

従来までの先行研究では、「運動嫌い」と「体育嫌い」の捉え方に関して曖昧な部分があった。佐久本(1978)は「運動嫌い」の概念について、運動対象のとらえ方、判断基準の置き方、問題意識の度合いなどによってその規定は多様であり、厳密な意味で規定するのは難しいとしている。また、円田(1989)では、「運動嫌い」と「体育嫌い」を区別することなく、「体育嫌い」はあくまでも「運動嫌い」の中に存在しているとしている。更に、神奈川県立体育センター(2007)においては「運動嫌い」と「体育嫌い」について同義に捉えている傾向も窺えた。このように、先行研究では「運動嫌い」「体育嫌い」の捉え方や概念に関して曖昧に扱われる傾向がある。しかし、「運動好きの体育嫌い」の存在が秦泉寺他(1993)、渡邊他(1997)、神奈川県立体育センター(2007)、小林(1989)、岡田(1979)などで指摘されていることや、「体育好きの運動嫌い」も少なからず存在していた(渡邊他1997)ことからすれば、「運動嫌い」と「体育嫌い」を別なものとして捉え、しっかりとした定義を定める必要がある。

## IV. 仮説の設定

以上の先行研究の検討を踏まえ、本研究では、以下の3点の仮説を設定し、調査分析を進める。

仮説1については、渡邊他(1997)、谷木(2003)、神奈川県立体育センター(2007)などにおいて同様の結果が挙げられていることから仮説に設定した。仮説2については、秦泉寺他(1993)、谷木(2003)などにおいて同様の

## 仮説 1

「運動嫌い」「体育嫌い」は学年進行とともに増加し、その傾向は「体育嫌い」に顕著である。

## 仮説 2

男女ともに「運動嫌い」に比べ「体育嫌い」が多く存在し、その傾向は女子に強い。

## 仮説 3

「運動嫌い」「体育嫌い」の発生要因における最も主要な要因は、「教師」である。

結果が挙げられていることから仮説として設定した。仮説3については、秦泉寺他(1993)において「運動嫌い」の主要な要因として「教師」の因子が挙げていることや、兵頭他(1992)によって「体育嫌い」の要因として、教師行動に着目した研究が行われていること、また、立木(1997)、谷木他(2003)などによっても「運動嫌い」「体育嫌い」の要因として教師の要因が挙げられていることから仮説として設定した。

## V. 研究の方法

### 1 「運動嫌い」「体育嫌い」の定義の明確化

「運動嫌い」「体育嫌い」の定義について、先に指摘した通り従来までの研究では両者を混同して捉える傾向があった。「運動嫌い」「体育嫌い」を別物として捉え、従来までの定義を参考にして内容を具体化し、「運動嫌い」「体育嫌い」を以下のように定義する。

まず、「運動嫌い」の定義としては、従来の研究における「運動嫌い」の定義を踏まえた上で、「子どもの自由な身体活動から生まれる遊びや、子ども自らの意思で行われる部活動(クラブ活動)に対して生活環境や体育授業などあらゆることから(原因)により非好意的あるいは消極的態度を形成し、運動することに対して拒否的な心理状態にな

ること」とする。「運動嫌い」の具体的な要因としては、運動技能・指導者(教師)・仲間・規則理解・性格・情緒的実感・無益感・運動種目・身体障害・病弱・肥満体・家族などが挙げられる。また、近年の研究では「運動嫌い」の要因として、「運動有能感」の欠如や、「運動嫌い」を生み出すメカニズムとして、「苦痛刺激との条件付け」や「学習性無力感」などが働いていると言われている。

次に「体育嫌い」の定義としては、従来の研究における「体育嫌い」の定義を踏まえた上で、「運動やスポーツを手段として、計画的・組織的に体育教師または担任(小学校の場合)が行う体育授業に対して、体育学習場面における特定のことがら(原因)により非好意的あるいは消極的態度を形成し、学習者が拒否的な心理状態になること」とする。「体育嫌い」の具体的な要因としては、教師の指導の仕方・教師の人間性・体育授業における苦痛経験などが挙げられる。また、教師の行動に着目した場合、子どもを「できる、できない」で比べ、上手な子だけが楽しめる、技術中心で教師中心の授業を行うことで「体育嫌い」が生まれると言われている。

### 2 質問紙法による調査

これまでの研究において「運動嫌い」「体育嫌い」の実態調査は実施されてはきたが、小学生・中学生・高校生に関してはデータが必ずしも十分ではない。

そこで本研究においては、「運動嫌い」「体育嫌い」における質問紙調査の内容をできるだけ増やし、小学校2年生から高等学校3年生の計11学年にわたる幅広い段階の調査を行った。

#### (1) 調査時期

2010年9月から2011年4月に質問紙調査を行い、約3ヵ月間で質問紙の回収を行った。

(2) 調査対象者

宮城県内の小学校・中学校・高等学校の各校種につき2校ずつ質問紙調査を行った。それぞれの回収数は、小学校618名、中学校412名、高校467名、合計1497名(男子749名・女子740名)である。

(3) 調査内容

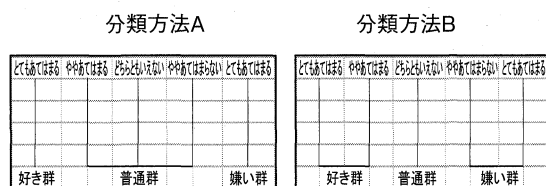
各学年においてクラスごとに保健体育(体育)の授業時間あるいは学級活動、ホームルーム時に各担任、体育教師による一斉実施により行った。問1では、「運動」と「体育」の好嫌について5段階尺度で質問した(小学校中学年から高校までは5段階尺度、小学校低学年は3段階尺度)。問2では、理想の教師像12項目を設定し、1位・2位・3位の形で1位から順に当てはまるもの3つを選択させた。しかし、今回の分析においては問2のデータは使用していない。問3では、秦泉寺他(1993)が使用した質問紙を参考にして、体育・運動を嫌いにさせる要因に関する質問22項目を設定し、5段階尺度で質問した。以上3つの問いからなる質問紙を使用し調査を行った。

(4) 分析方法

1) 「運動嫌い」「体育嫌い」の実態

図1に示すとおり、運動に対する好嫌と、体育の授業の好嫌をストレートに5段階尺度で問う形式を用いた。また、「運動嫌い」「体育嫌い」の分類として下記の表のとおり2種類の分類が考えられるが、本研究ではBの分類法を採用した。

分類方法A・B(図1)



集計方法としては、「運動嫌い」「体育嫌い」の学年進行、性別、における単純集計と

クロス集計を行った。クロス集計の有意検定は、すべての項目で $\chi^2$ 検定を行った。

2) 「運動嫌い」「体育嫌い」の発生要因

運動・体育の好嫌を因子分析により検討し、実態調査により明らかになった9群(図2)のうち「嫌い群」において下位尺度得点の比較を行い、それぞれの影響力を明らかにした。分析方法としては、因子分析により抽出された4因子から下位尺度得点を出し、群ごとに一元配置の分散分析を用い、多重比較を行った。多重比較はすべての項目でTukey法を用いた。

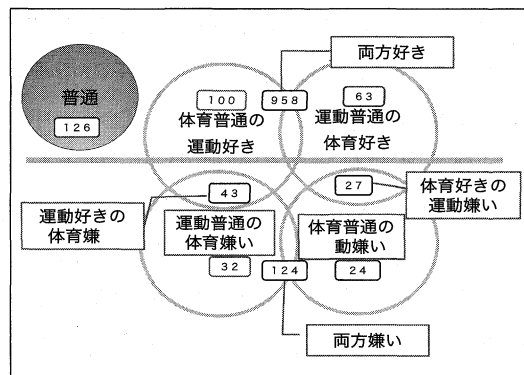
VI. 結果と考察

1 「運動嫌い」「体育嫌い」の実態

(1) 運動と体育の好嫌意識の分類

運動と体育の好嫌意識を分類した結果、以下の9群となった(図2、表1)。

「運動」と「体育」の好嫌意識の分類(図2)



「運動」と「体育」の好嫌意識の分類(表1)

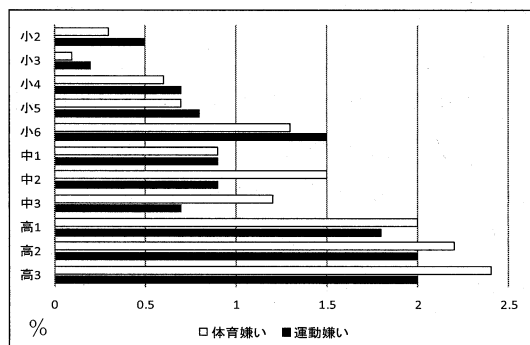
	運動好き	運動普通	運動嫌い	合計
体育好き	64.0%	4.0%	1.8%	69.8%
体育普通	7.0%	8.0%	1.6%	16.6%
体育嫌い	2.9%	2.1%	8.3%	13.3%
合計	73.9%	14.1%	11.7%	100%

(2) 学年進行に伴う変化

学年進行に伴う変化では「体育嫌い」は学年進行に伴う増加があるものの、「運動嫌い」には学年進行に伴う増加はみられなかった。また、小学生に「運動嫌い」が多く、

中高生に「体育嫌い」が多く存在した(図3)。よって、「運動嫌い」において学年進行に伴う増加がみられなかったことから、仮説1は支持されなかった。

「運動嫌い」「体育嫌い」の比較(図3)



この結果に関しては、小学生と中高生で体育の授業における指導形態が大きく変わることが影響していると考えられる。具体的には、小学生ではどの教科も学級担任により授業が行われるが、中高生になると教科担当の教師により専門的に授業が行われる。つまり、小学生の頃は運動の基礎を培う時期であり体育の授業では、担任の指導の下遊びが多く取り入れられていたが、中高生になると教科担当の教師の下、様々なスポーツを行い、また、各種目の特性を理解し、技能向上を目指さなければならない。この変化により子ども達が体育の授業に対して非好意的意識を形成してしまう可能性が考えられる。「運動嫌い」に比べ「体育嫌い」が多く存在することも体育の授業の特性に関連していると推定される。

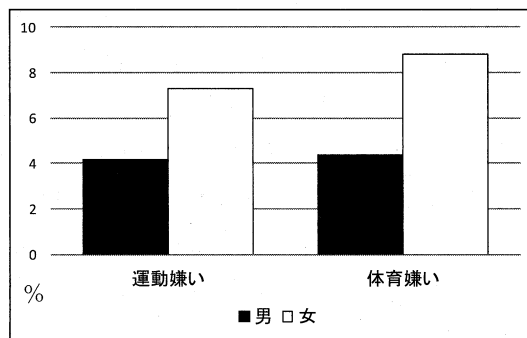
### (3) 性別による差

性別による差では、「運動嫌い」は男子4.2%、女子7.3%、「体育嫌い」は男子4.4%、女子8.8%であり、男子に比べ女子に「運動嫌い」「体育嫌い」が多く存在した。また、男女ともに「運動嫌い」に比べ「体育嫌い」が多く、その傾向は特に女子に強いことが明らかになった(図4)。この結果から、男子と女子では運動と体育に対する意識の差があ

ると言える。つまり、男子は運動と体育に対し、さほど差を感じていないが、女子に関しては「運動」よりも「体育」に対して、非好意的意識を持つ子どもが多く存在していると推定できる。

よって仮説2は支持された。

「運動嫌い」「体育嫌い」の比較(図4)



## 2 「運動嫌い」「体育嫌い」の発生要因

### (1) 発生要因に関する因子分析

秦泉寺他の作成した体育・運動嫌いの要因調査を参考に作成した22項目からなる調査用紙を用いて、運動・体育に対する意識を因子分析によって検討した。それらの因子のうち固有値が0.5以上の値を示す4因子を有意な因子として採用した(表2)。第1因子は、運動や体育に対して良い経験や印象を持ち、体育を通して獲得できるメリットを挙げていることから、「運動・体育メリット因子」とする。第2因子は、体育の教師に対して好印象な意見を挙げていることから、「教師好印象因子」とする。第3因子は、家族が運動に対して良い意識を持っていることを挙げていることから、「家族運動好き因子」、最後に第4因子は、体育の授業を通して被るデメリットを挙げていることから、「体育デメリット因子」とする。

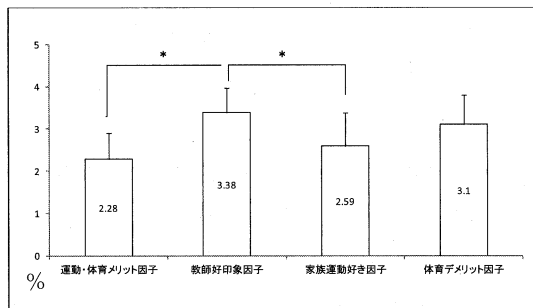
発生要因に関する因子分析(表2)

質問項目	成分			
	運動・体育メリット	教師好印象	家族運動好き	体育デメリット
7.体育の授業が楽しい	0.728230676			
9.体育で運動が上達した	0.725442259			
11.体育で友達と協力した	0.692100036			
8.体育健康に大切	0.673969299			
10.体育で友達と仲良くなった	0.63279224			
2.運動が得意	0.621455258		0.443599136	
1.ゲームやTVより運動が好き	0.548933131		0.486649566	
3.汗かくのが気持ちいい	0.417194771			
18.先生ができない人に		0.794413574		
20.先生の教え方がわかりやすい		0.766325594		
19.上手できると先生に褒められる		0.762532388		
16.先生は運動が得意		0.664324183		
17.先生と一緒に運動する		0.57899562		
22.先生と一緒に運動してほしい				
5.家族は運動することが好き			0.817541646	
6.家族で運動をよくする			0.795985747	
4.親から運動・スポーツを			0.600293858	
14.体育の時間は決まりが多い				0.715716063
13.体育着替えるの大変				0.713555938
21.先生によく注意される				0.493319988
12.体育で怪我した				0.445742384

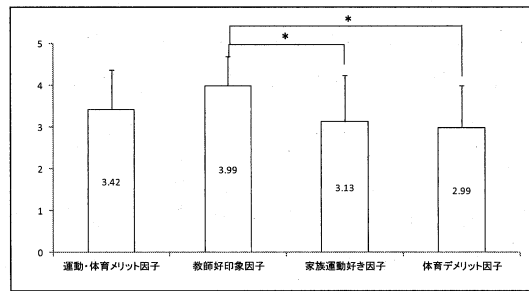
(2) 「運動嫌い」の発生要因

「運動嫌い」においては下位尺度得点の比較を行った結果、 $p < 0.05$  で有意な差が確認された(図5、6)。「運動嫌い」の子どもの特徴は、「運動が得意だ」「運動をして汗をかくのが気持ちいい」、「体育で友達と仲良くなった・協力した」「体育で運動が上手くなった」などの運動や体育に対する良い経験や良い印象を持っている子どもが少なく、「家族でよく運動する」「家族が運動をすることが好きだ」など家族の運動への愛好度も低いことが明らかになった。この特徴から、子どもの運動や体育における良い経験や良い印象が不足することや、家族の運動への愛好度が低いことが「運動嫌い」を発生させる大きな要因になると推定される。また、仮説3を実証する上では「教師好印象因子」が有意に低くならなければいけなかったが、結果は仮説3のようにならなかった。よって「運動嫌い」について仮説3は支持されなかった。

「体育普通の運動嫌い」における下位尺度得点の比較(図5)



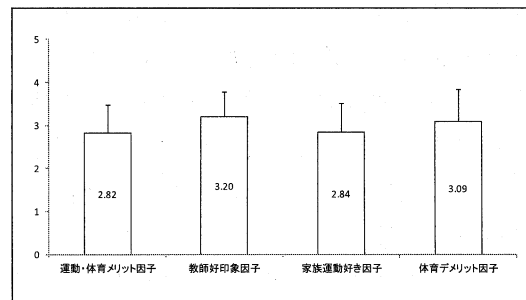
「体育好きの運動嫌い」における下位尺度得点の比較(図6)



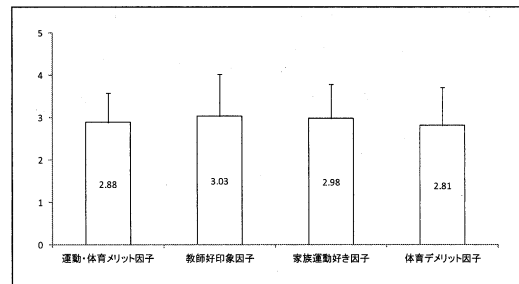
(3) 「体育嫌い」の発生要因

「体育嫌い」の下位尺度得点を比較した結果、抽出された4因子からは特に目立った要因はみられず、有意な差のある因子は確認されなかった(図7、8)。このことから今回抽出された4因子は「体育嫌い」に対し、どれも均等な影響を与えているといえる。また、仮説3を実証する上では「教師好印象因子」が有意に低くならなければいけなかったが、結果は仮説3のようにならなかった。よって「体育嫌い」について仮説3は支持されなかった。

「運動普通の体育嫌い」における下位尺度得点の比較(図7)



「運動好きの体育嫌い」における下位尺度得点の比較(図8)



しかし、「体育好きの運動嫌い」に注目すると「嫌い群」(「運動普通の体育嫌い」「運

「運動好きの体育嫌い」「体育普通の運動嫌い」「体育好きの運動嫌い」「両方嫌い」の中で「教師好印象因子」が最も高いことが明らかになった。つまり、「体育好きの運動嫌い」には教師に良い印象をもった子どもが多く存在するということである。論点からは若干ずれてしまうものの、この結果から言えることは、運動は嫌いであっても体育の教師に対して良い印象を持つことが、体育を好きになる要因になると推定される。

先行研究において「運動嫌い」「体育嫌い」の要因として教師の要因は最も注目すべきものであったが、今回の調査分析の結果においては「運動嫌い」「体育嫌い」ともに他因子と比べ「教師好印象因子」が最も高いことが明らかになった。つまり、運動や体育が嫌いであっても体育の教師に対しては良い印象を持つ子どもが多く存在するということである。

しかし、体育の教師に対して良い印象を持つという事実のみで、「運動嫌い」「体育嫌い」は体育の教師の要因ではないと断言することはできない。兵頭ら(1992)は、体育嫌いを生起させる教師行動の要因には大きく分けて、①教師の人間性や性格など教師その人に関わる要因と、②指導方針や指導技術などの教師の指導方法に関わる要因の2点があると述べている。今回の調査では①の教師の人間性や性格などを重視した質問が大部分を占めたことから、指導方針や技術についての質問ができなかった。こうした制約のため「運動嫌い」「体育嫌い」の子どもは、体育の教師に対して良い印象を持っているものの、教師の指導方針や技術などを踏まえると、教師には問題はないと必ずしも言い切ることはできないと考えられる。

## Ⅶ 今後の課題

今回の調査を通し「運動嫌い」「体育嫌い」の子ども達が体育の教師に対して良い印象を持つという意外な事実が明らかになった。

今後の課題としては、「嫌い群」のみではなく「好き群」にも着目して分析を行う必要がある。また、教師の要因については質問紙調査の改善を行うなど今後検討して行く必要がある。そして、「体育好きの運動嫌い」については、実際に体育は好きであるが運動が嫌いな一部の子どもに焦点を絞り4因子が与える影響について更に検討する必要がある。

## Ⅷ 参考文献

- ・ 円田善英『体育心理学』201 - 214 健帛社(1989)
- ・ 岡澤祥訓「運動好きと自己有能感」、『体育の科学』53巻12号905 - 909(2003)
- ・ 岡田和雄「運動嫌いと体育嫌い」『体育科教育』22巻4号12 - 14(1979)
- ・ 岡田和雄「体育嫌いをなくすための十章」『体育科教育』37巻12号34 - 37(1989)
- ・ 加賀はづき「「運動嫌い」・「体育嫌い」について～教師と生徒の相互認識差に着目して～」、仙台大学大学院修士論文(2006)
- ・ 賀川昌明「小学校高学年児童の体育授業に対する好意度を決定する要因分析」鳴門教育大学学校教育実践センター159 - 165(2002)
- ・ 「学校体育に関する児童生徒の意識調査 - 小学生・中学生・高校生の意識 - (3年間継続研究のまとめ)」神奈川県立体育センター指導研究部スポーツ科学研究室(2007)
- ・ 小林一久「運動好きの体育嫌い」、『体育科教育』37巻12号19 - 20(1989)
- ・ 佐久本稔「学校体育期の“運動嫌い”に関する研究」福岡女子大学家政学部編



- 55 - 78(1978)
- ・ 杉原隆 『運動指導の心理学－運動学習とモチベーションからの接近』151 - 153, 大修館書店(2006)
  - ・ 鈴木清「運動嫌いの子どもの背景」『体育科教育学』22 卷 4 号 6 - 8(1994)
  - ・ 秦泉寺他「宮崎県における体育・運動嫌いの実態と嫌いにさせる要因に関する研究」宮崎大学教育学部紀要 23 - 43 (1993)
  - ・ 立木正「体育嫌いを生み出す原因に関する研究－東京学芸大学学生の意識調査から－」東京学芸大学紀要 191 - 201 (1997)
  - ・ 高田典衛「運動嫌いな子どもの体育指導」『体育の科学』20 卷 5 号 298 - 300(1970)
  - ・ 玉木正之『スポーツとは何か』講談社(1999)
  - ・ 玉木正之『スポーツ解体新書』朝日文庫(2006)
  - ・ 友添秀則「新学習指導要領と体育」,『体育科教育』第 6 号, 10-14 項(2008)
  - ・ 友添秀則『教養としての体育原理－現代の体育・スポーツを考えるために－』, 大修館書店(2009)
  - ・ 友添秀則『体育の人間形成論』, 大修館書店(2009)
  - ・ 日本スポーツ心理学会編『スポーツ心理学事典』278 - 279 大修館書店(2008)
  - ・ 阪田尚彦『学校体育授業事典』, 中込四郎「運動嫌い(体育嫌い)」大修館書店, 7 (1995)
  - ・ 阪田尚彦「体育が嫌いな子を好きにさせる教授技術」『体育科教育』37 卷 12 号 28 - 30(1989)
  - ・ 藤巻公裕「子どもを運動嫌いにする背景」『体育科教育』31 卷 5 号 22 - 25(1983)
  - ・ 兵頭寛「体育嫌いを生起させる要因の研究－体育授業における教師行動について－」愛媛大学教育学部紀要 163 - 174 (1992)
  - ・ 正木健雄「運動嫌いの学生の体育指導」『体育の科学』20 卷 5 号 304 - 307(1970)
  - ・ 三浦弓杖「運動嫌いの学生の指導」『体育の科学』20 卷 5 号 301 - 303(1970)
  - ・ 渡邊義行他「運動および教科体育の好・嫌に関する調査研究」(1997)
  - ・ 矢野久英「体育嫌いを直す評価」,『体育科教育』22 卷 4 号 18 - 20(1974)
  - ・ 谷木龍男「運動・体育の好き嫌い(態度)に関する研究レビュー」,『体育の科学』53 卷 12 号 940 - 944(2003)